

優秀賞（臨床工学技士部門） 加藤孝昭

NICUから在宅へ

人工呼吸器が紡ぐ家族と成長の物語

今回の物語は、生後約3年間をNICU（新生児集中治療室）で人工呼吸器管理のもとで過ごした患児の成長とその家族の物語です。私は臨床工学技士として、この患児の人工呼吸器管理に携わり、本人やご家族と密接に関わってきました。

長期入院生活の中で、ご家族は人工呼吸器をはじめとする医療機器の存在を日常として受け入れる一方で、管理に対する不安を抱えながらも、患児の成長に希望を持ち続けていました。

退院が現実味を帯び始めた頃、在宅用人工呼吸器への移行が課題となりました。私はご家族に対し、機器の選定や管理方法、緊急時の対応について一つひとつ説明し、実践練習を重ねました。特に印象的だったのは、初めて自家用車での移動練習を行い、NICUの外に出た瞬間です。生まれて初めて外の世界を目にした患児は、興味深そうに周囲を見回しており、その姿にご家族も深い感動を覚えていました。

この瞬間は、医療者である私にとっても特別な経験となりました。

退院後も患児は、数か月ごとに検査入院を続けています。そのたびに私は新しいスキルや能力を身につけ、ご家族とともに成長の喜びを共有しています。会うたびに教えてくれるキャラクターの名前が増えたり、人工呼吸器の設定が減少したりと、在宅管理に対するご家族の自信が深まっている様子を見ると、医療従事者としてのやりがい強く感じます。

このような事例を通して、医療従事者が患者や家族と築く信頼関係の重要性、そして在宅医療における多職種連携の価値を改めて実感しました。特に、在宅医療への移行時のサポートや、退院後も患者と家族を継続的に支える仕組みの構築が、患者のQOL向上に大きく寄与することを痛感しています。

医療機器のスペシャルである臨床工学技士が、医療機器を通して患者とご家族が安心して生活を営めるよう支援を継続することは、臨床工学技士としての使命であり、これからの経験を活かして取り組んでいきたいと思えます。

